

| | |
|---------|--|
| 氏名(国籍) | 黄 ^{ふあん} 東 ^{どん} 遠 ^{うおん} (韓国) |
| 学位の種類 | 博士(学術) |
| 学位記番号 | 博甲第3585号 |
| 学位授与年月日 | 平成17年3月25日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当 |
| 審査研究科 | 文芸・言語研究科 |
| 学位論文題目 | 山口素堂の研究 -芭蕉との交流を中心に- |
| 主査 | 筑波大学教授 犬井善壽 |
| 副査 | 筑波大学教授 稲垣泰一 |
| 副査 | 筑波大学教授 博士(人文科学) 清登典子 |
| 副査 | 筑波大学教授 博士(文学) 松本肇 |
| 副査 | 筑波大学教授 文学博士 堀池信夫 |

論文の内容の要旨

本論文は、松尾芭蕉との間で文芸面において深い交友関係があったことで知られる山口素堂について、その生涯の文学的事跡を明らかにするとともに、彼が生み出した文学作品を従来の芭蕉を中心とする観点から離れて読み直すことを通して、その文学活動の全体像と俳諧史における意味とを呈示しようとするものである。

本論文の構成は以下の通りである。

序論

第一部 第一章 山口素堂の生涯と文学活動

第二部 第二章 「蓑虫説」論

第三章 『芭蕉庵三ヶ月日記』論

第四章 序文・跋文論

第五章 漢詩文論Ⅰ - 「言語遊戯性」に注目して

第六章 漢詩文論Ⅱ - 「隠逸性」に注目して

結論

第一部は素堂についての伝記研究である。第一章として、素堂の生涯にわたる文学的事跡とくに俳諧活動につき、資料調査および実地調査に基づいて徹底して追求し、その成果を、芭蕉との交流以前、芭蕉との交流期、芭蕉没後の三期にわけて年代順に整理して吟味する。

第二部は作品研究である。第二章において、芭蕉との交流の中で成立した素堂作の俳文「蓑虫説」を取り上げ、作品中の「蓑虫」が、和歌・連歌などの先行文芸における意味を受け継ぎながら、荘子思想における「無能」「無才」を体現する虫という、先行文芸には見られなかった新たな意味を付与されたこと、以後の俳諧作品においてその意味が受け継がれるようになり、さらに、芭蕉および素堂の寓喩として「蓑虫」が用いられる例が見られるようになるなど、後代の俳諧にも大きな影響を与えたことを明らかにする。

第三章においては、芭蕉・素堂編『芭蕉庵三ヶ月日記』について検討する。素堂から芭蕉への働きかけによって成立したこの作品は、従来、ここに収載される芭蕉作の俳文「芭蕉を移す詞」のみが単独で解釈され研究されてきたが、著者は『芭蕉庵三ヶ月日記』を素堂を軸とする「座」の交流の中に置いて分析することによって、作中に載る「芭蕉を移す詞」が芭蕉庵再建に尽力した素堂をはじめとする諸家に対する感謝の念を込めて草されたものであり、とくに内容と表現両面の検証から、第二章で検討した素堂の「蓑虫説」に対応させる意識で執筆された俳文として捉え直す必要があると主張する。

第四章においては、素堂が別人の編になる諸書に寄せた序文・跋文のうち、芭蕉生前期のもの12点を取り上げ、文体と内容の特徴を押さえ、そこに見える素堂の文芸観・俳諧観を明らかにする。さらに、従来その内容から芭蕉による改作ではないかとの疑義が提出されている『甲子吟行画卷』跋文について、素堂作であることが確実である諸序文・跋文との字句表現・思想の比較、および芭蕉作の紀行文・俳文との字句表現・思想の比較検討を通じて、素堂作の可能性が高いことを論証する。

第五章・第六章では、従来ほとんど研究されてこなかった素堂の全漢詩文59点に検討を加える。まず第五章においては、素堂作の漢詩文の全体的傾向を押さえた上で、優れた漢詩文の作り手であった素堂がその一方で一般的な漢詩には見られない意図的に押韻字をすべて同字とするというような「言語遊戯性」のある作品を作っていたことに注目する。そして、それらが主に芭蕉を中心とする人々との交流の中で作られたものであること、同時代に作られた諸家の漢詩文と比較すると、儒者たちの作った漢詩文よりは仮名草子・咄本に収載された狂詩との共通性が見られることを指摘し、素堂の創作における言語遊戯性という立場を明らかにする。

第六章においては、素堂作の漢詩文に最も多く見られる素材であり思想である「隠逸」に注目し、これらの詩の典拠を探索する作業を通じて、彼の隠逸精神と理念を支えていたものが老荘思想および神仙思想を骨幹としたもので、具体的には『楚辞』所収の『離騷』『遠遊』『漁父』や『文選』巻第二「遊仙」などのないいわゆる「求仙文学」「遊仙文学」の流れを汲むものであること、さらにそれだけではなく、陶淵明・白楽天などの中国詩人たちの「隠逸」と関連する詩を踏まえてその精神に倣おうとする姿勢があること、「隠逸」と関わる儒学思想をも詩中に包括的に取り込んでいることなどを具体的に指摘する。

結論においては、以上の検討の結果として、素堂を芭蕉周辺の俳人の一人と捉える従来の見方を退ける。素堂は漢詩文、和歌、茶道、俳諧に通じ、儒者・歌人・茶人・俳人などと幅広く交流した江戸時代初期の典型的な文人の一人として把握する必要があることを主張し、その文学活動全体を見渡した上で、その中に芭蕉との交流やそこから生み出された作品を位置づける必要があると結論する。

審査の結果の要旨

本論文は、伝記研究と作品研究という二つの面から、山口素堂という江戸時代の文人の文学活動の全体像とその意味とを明らかにしたものである。

まず、伝記研究の面では、徹底的な資料調査と丹念な実地調査を行うことによって、これまで幾人もの先人が明らかにして来た事項に数多くの修正・改正を加えるとともに、著者自身が新たに見出した資料に基づく事項を追加・整理し、現時点における最良の伝記研究の成果として呈示している。この実証的な成果は学界に貢献する大きな業績であり、高い評価に値する。

次に、作品研究の面では、文人素堂の文学活動を捉える上で欠かせないものでありながら、従来ほとんど研究対象とされてこなかった素堂作になる諸書の序文・跋文および漢詩文作品を取り上げて詳細に解説し検討を加え、その文体上・内容上の特色を明らかにしたことは、研究史上画期的なことである。とくに素堂作の漢詩文の検討を通じて、その漢詩文に狂詩から学んだと考えられる言語遊戯性のある作品が見えることを

指摘したこと、さらに「隠逸」を素材とする漢詩作品の多さとその背景となる教養や理念を具体的に提示したことは、漢詩人としての素堂を捉える上で大きな成果であり、今後の素堂作の漢詩文研究の礎を築くものと言える。

さらに、芭蕉との交流の中から生み出された俳文や俳諧作品について、従来の芭蕉を中心として素堂を見る観点を退け、それらが生み出された芭蕉との交流の様相を具体的に追求することを通して新たな解釈を提示し、その検討によって素堂の作品が従来言われているような芭蕉からの一方的な影響下に成ったものではなく、むしろ素堂から芭蕉への影響さえも認められることを証明している。このことはひとり素堂作品の見直しを促すばかりでなく、学界に芭蕉および蕉門の俳諧作品の見直しを要求するものである。

このように、本論文は、山口素堂研究として伝記研究の面でも作品研究の面でも従来水準を遥かに超える画期的なものであるが、素堂の文学活動の全体像を追求することを目指しながら、和歌作品の検討や茶道における事跡の追求などが十分には行われているとは言えない点が瑕瑾と言えなくはない。それらの分野に対する本格的な検討と本論文では取り上げられなかった素堂の俳諧作品や漢詩作品などの検討が、本論文の主張を更に確としたものにする筈である。

とはいえ、本論文が、これまで松尾芭蕉周辺の一人の俳人としてしか扱われてこなかった山口素堂を江戸時代初期の典型的な文人の一人として把握し直し、生涯にわたっての文学的事跡を明らかにするとともに、具体的な作品研究を通じてその文学活動の全体的な在り方を鮮やかに提示していることは確かである。本論文は、山口素堂の作家研究としてのみならず、近世初期文壇に関する研究にも大きな貢献をなすものと言えることができる。

よって、著者は博士（学術）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。